

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 10 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520311

研究課題名（和文） 近代以降のヨーロッパにおける声とテキスト

研究課題名（英文） Voices and Texts in Modern Europe

研究代表者

相澤 直樹（AIZAWA NAOKI）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：40212344

研究成果の概要（和文）：近代以降のヨーロッパにおける「声」と「テキスト」の複雑で微妙な関係の諸相を、ドイツのラジオ・ドラマ、シュルレアリスムの「オートマティスム」、ロシア・フォルマリズムにおける「声」の問題、近代フランス文学における音声装置（グラモフォン、電話）の表象、ロシア小説とその脚色における挿入歌の様態などの具体的な事例にもとづいて明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the various aspects of the complicated relationship between the "Voices" and the "Texts" in Modern Europe, in the analysis of German Radio Dramas, Surrealist "automatism", Russian Formalism, French representation of the gramophone and telephone, inserted Songs in the Russian novel and its dramatization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：声、テキスト、近代ヨーロッパ、朗読、蓄音機、自動記述、ロシア・フォルマリ
スト、ラジオ・ドラマ

1. 研究開始当初の背景

近代社会における「テキストと身体」あるいは「メディアと知覚」の問題系は、1990年代以降活発に論じられるようになったが、「声」という聴覚現象と「テキスト」との関係性を考察の中心に据えた論考は必ずしも多

くはなかった。また、ジャック・デリダの思想にとっても「声とテキスト」は最重要のテーマであったが、脱構築の核心として論じるあまり、これを文化的・社会的・歴史的な文脈の中で把握しようとする文化史的なアプローチは稀薄であった。一方、英・仏・独・

露文学研究者による個別的な論考には文化的なアプローチに優れたものが少なくないが、その多くは各国文学・文化論の枠内に視野を限定しており、相互交流が密で、差違をはらみながらも事実上一つの文化圏を形成していた「ヨーロッパ」を総体的に俯瞰する視点には欠けるところがあるように思われた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀初頭から20世紀半ばまでのいわゆる「近代」に、「声とテキスト」の問題が尖鋭なかたちであらわれた英国、フランス、ドイツ、ロシアの複数の文化事象を取り上げ、実証的に考察したうえで、たがいに比較対照して行き、この作業を通じて、近代以降のヨーロッパにおける「声」と「テキスト」の複雑で微妙な関係の諸相を、その総体と個別の両面において具体的に浮き彫りにすることであった。

3. 研究の方法

複数の外国文化研究者による共同研究である本研究においては、英国、ドイツ、フランス、ロシア文学・文化研究者が、各自の専門分野における文化事象を「声とテキスト」という観点から実証的に考察し、その結果を共同討議に付す。この作業をくり返すことで、近代ヨーロッパにおける声とテキストの諸相に関する多面的全体像を構築せんと試みた。

4. 研究成果

本研究の参加者たちは、平成21年度中に2回の研究会を行った。1回目は参加者がそれぞれの研究の進捗状況を報告し、質疑応答を通してヨーロッパ各地域の差異と交流の諸相を浮かび上がらせ、本研究の中での各自の位置と役割を確かめる場とした。特にドイツ出張から帰ったばかりの渡辺将尚の報告は、戦後ドイツのラジオ・ドラマをめぐる、現地で収集した新しい資料に基づく知見に満ちていた。2回目は日本フランス語フランス文学会東北支部とのタイアップで、同支部の大会におけるワークショップ<声とテキスト>において本研究の参加者たちが発表を行った。特に、ロシア・フォルマリスト達の論考の中でテキストと「声」「身体」との関係がどのようにイメージされていたのかを研究する中村唯史は、かつては「音声中心主義」の批判を受けたロシア・フォルマリズムが、実は決して単純な「音声中心主義」ではなかったことを論証し、一方齊藤哲也は、「声」の書き取りとしてのシュルレアリスム

の「オートマティスム」の問題が、ロマンティックな内的な声の書き取りという問題系に連なるかに見えて、実はある種の伝言ゲームのように齟齬や異稿を生産する問題機制として働くという理論的な転換を示した。その他、19世紀末から20世紀初頭における音声メディア（電話、蓄音機、テアトロフォン）の発達と文学的なテキストの相互的な影響関係を研究する阿部宏慈は、ブルーストにおける「再読」のシステムと内在的な<声>としての「述べられたこと」の問題を扱った論文を発表した。プロアマ混合の演劇集団の主宰者と、公開朗読の場における自作品の「朗読者」という両面からチャールズ・ディケンズを分析する中村隆は、文献収集・整理を進めた。19世紀ロシア文学における朗読、講演・演説を研究する相澤直樹は、作家・編集者であったИ. И. Панаевを中心とした文献収集・整理を進めるとともに、研究会の取りまとめ等を行った。

本研究の参加者たちは、平成22年度中に2回の研究会を開いた。1度目は夏の終わりにペテルブルグへ出張した相澤直樹が、19世紀を代表するジャーナリストでもあったネクラソフとパナーエフの居所と仕事場を兼ねた住居を保存・展示してある市内の「ネクラソフの家=博物館」と、ペリンスキー、ツルゲーネフはじめ著名な文学者たちが眠る、郊外のヴォルコヴォ墓地への訪問についての報告からはじめ、サロンの中での「声とテキスト」の生成のされ方、追悼演説の役割と意義について考察した。2回目は齋藤哲也がシュルレアリスム運動の中心に位置する「オートマティスム」（自動記述）の問題について、従来語られてきたような、ロマン主義的なインスピレーションとは違う観点から再考する試みを行い、とくに同時代の科学技術（無線、電話、X線など）とのかかわりから、シュルレアリスムの活動を歴史的に位置づけることで、文学や美術の問題を認識論的な布置におきなやすことを目指そうとした。

渡辺将尚はジークフリート・レンツのラジオドラマ「家宅捜索」と長編小説『パンと見世物』について論考を発表した。中村唯史はトルストイの『戦争と平和』における「崇高」の問題についての考察を論文にまとめたほか、国際スラヴィスト会議でエイヘンバウムの歴史認識について発表した。中村隆は博士論文についての報告の中で、ディケンズの「公開購読」を扱った。その他、前年度に日本フランス語フランス文学会東北支部で行った「声とテキスト」をめぐるワークショップでの活動の報告が同会同支部の会報に掲載された。

本研究の完成年度にあたる平成23年度には外部の研究者も招いた研究会が開催された。招待講師の成田雄太は、我が国における無声映画（活動写真）からトーキーへの移行時代の〈弁士〉の役割と位置について、群馬県太田市立新田図書館での資料の発掘成果をもとに報告を行い、弁士とトーキーの関係がふつう考えられているよりも複雑多様であることを指摘した。また、研究会で中村唯史は『戦争と平和』を手がかりにバフチンのトルストイ観を探り、両者それぞれの〈声〉との関わり方を解き明かしながら、「ダイアログ」の思想の人とはまた別のバフチンの顔を浮かび上がらせた。

相沢直樹は大正時代の我が国で上演された『その前夜』劇（楠山正雄脚色）とツルゲーネフの原作小説、ソ連時代のアルプゾフ脚本との比較研究を通して、登場人物たちの〈声〉の現れの特異な形態である「歌」の諸相について、比較文学的・文化史的な見地から考察を試みた。阿部宏慈はヴィリエ・ド・リラダンからコクトーに至る、近代フランス文学における音声装置（グラモフォン、電話）の表象に「身体なき声」・「声なき身体」という対概念で切り込む研究を発表した。渡辺将尚は引き続きジークフリート・レンツを中心に戦後ドイツのラジオドラマについての研究を進め、その成果を論考にまとめた。中村唯史は『戦争と平和』を手がかりにバフチンのトルストイ観を探る試みを論考にまとめた他、内外でこれに関連したテーマやオリガ・ベルゴリツの『昼の星』についての研究発表を行って、ソ連時代の知識人の〈声〉のあり方について一石を投じた。

本研究の総括として、平成23年度末には研究論文集を刊行した（「近代以降のヨーロッパにおける声とテキスト」平成21年度～平成23年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究論文集）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

- ① 阿部宏慈，身体なき声、声なき身体、あるいは近代フランス文学における音声装置（フォノグラフ、電話）の表象——ヴィリエ・ド・リラダンからコクトーまで——，山形大学人文学部研究年報，査読有，第9巻，2012年，31-68.
- ② 中村唯史，「アウステルリッツの空」を埋める：バフチンのトルストイ観，「近代以降のヨーロッパにおける声とテキスト」（科研費補助金（基盤研究(C)）研

究論文集），査読無，2012，51-60.

- ③ 渡辺将尚，戦後ドイツのラジオドラマ——その存在意義，ジークフリート・レンツの場合，「近代以降のヨーロッパにおける声とテキスト」（科研費補助金（基盤研究(C)）研究論文集），査読無，2012，39-50.
- ④ 渡辺将尚，固定される聴取者，明かされない過去——ジークフリート・レンツのラジオドラマ「迷宮」，山形大学人文学部研究年報，査読有，第9号，2012，171-184.
- ⑤ 齊藤哲也，「周知」のシュルレアリスム？，近代以降のヨーロッパにおける声とテキスト（科研費補助金（基盤研究(C)）研究論文集），査読無，2012，61-76.
- ⑥ 相沢直樹，小説と舞台のあいだ——楠山正雄の『その前夜』脚本をめぐる——，山形大学大学院社会文化システム研究科紀要，査読有，第8号，2011，15-39.
- ⑦ 中村唯史，トルストイ『戦争と平和』における「崇高」の問題，山形大学人文学部研究年報，査読有，第8巻，2011，113-143.
- ⑧ 渡辺将尚，時間の文学としてのジークフリート・レンツ——ラジオドラマ「家宅捜索」と長編小説『パンと見世物』，山形大学人文学部研究年報，査読有，第8巻，2011，145-159.
- ⑨ 阿部宏慈，中村唯史，齊藤哲也，渡辺将尚，ワークショップ報告「声とテキスト」，Nord-Est（日本フランス語フランス文学会東北支部会報），査読無，第3巻，2010，1-18.
- ⑩ 中村隆，博士論文報告 An Introductory Essay on My Doctoral Dissertation, デイケンズ・フェロウシップ日本支部年報，査読無，33巻，2010，158-166.
- ⑪ 中村唯史，ソ連における翻訳の問題に寄せて：ガムザトフの詩『鶴』の再考まで，辺境と異境—非中心におけるロシア文化の比較研究，査読無，2010，18～35
- ⑫ 阿部宏慈，Du système de la relecture chez Proust, Marcel Proust 7, “Proust sans frontières 2”, 査読無，2009，185-204.

[学会発表] (計7件)

- ① 中村唯史, Заполнить „небо над Аустерлицем” : Взгляд М. Бахтина на Л. Толстого 《Жизнь сердца》: дух-душа-тело и Я - Ты отношение в русской литературе и культуре XX-XXI веков в европейском контексте, Maria Curie-Skłodowska University, 2011年11月18日, Lublin, Poland
- ② 中村唯史, ソ連文学の一底流について, 日本ロシア文学会第61回研究発表会ワークショップ「いま、ソ連文学を読み直すとは」, 2011年10月9日, 慶應義塾大学日吉キャンパス
- ③ 中村唯史, Before an Unknownable Current: Boris Eikhenbaum's Perception of History, ICCEES VIII World Congress, 2010年7月31日, スウェーデン王国ストックホルム市
- ④ 中村唯史, 1910-20年代のソ連批評理論における声とテキスト, 日本フランス語フランス文学会東北支部会2009年大会ワークショップ「声とテキスト」, 2009年11月28日, 山形大学人文学部
- ⑤ 渡辺将尚, 戦後ドイツのラジオドラマ, 日本フランス語フランス文学会東北支部会2009年大会ワークショップ「声とテキスト」, 2009年11月28日, 山形大学人文学部
- ⑥ 齋藤哲也, 声を送る—オートマティスムのヴァリエーション, 日本フランス語フランス文学会東北支部会2009年大会ワークショップ「声とテキスト」, 2009年11月28日山形大学人文学部
- ⑦ 中村唯史, エイヘンバウム『私の年代記』考, 日本ロシア文学会第59回全国大会, 2009年10月25日, 筑波大学大学院人文社会科学研究科

6. 研究組織

(1) 研究代表者

相澤 直樹 (AIZAWA NAOKI)

山形大学・人文学部・教授
研究者番号: 40212344

(2) 研究分担者

阿部 宏慈 (ABE KOJI)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号: 10167934

中村 隆 (NAKAMURA TAKASHI)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号: 00207888

中村 唯史 (NAKAMURA TADASHI)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号: 20250962

渡辺 将尚 (WATANABE MASANAO)
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号: 90332056

齋藤 哲也 (SAITO TETSUYA)
明治学院大学・文学部・准教授
研究者番号: 10507619